

2026 JUA/EAU Resident Programme 参加報告

田 中 大 樹（東京科学大）

この度、JUA/EAU Resident Programme の一員として、2026年3月13日から16日まで英国ロンドンのExCeL Londonで開催されたthe 41st Annual EAU Congress（EAU26）に参加させていただきました。応募時はまさか参加できるとは思っておらず、選考結果の通知メールを受け取った瞬間の高揚感は今でも鮮明に覚えています。

今回のプログラムでは、EAU Congress への参加に先立ち、Guy's Hospitalにて病院見学をさせていただきRARNとRobotic ureterolysis（尿管剥離術）を拝見しました。尿管剥離術は日本では実際に見たことのない術式でしたが、同術式でご高名なFernando先生の手術を間近で見学でき、剥離層の見極めやロボット手術における繊細な操作の重要性を強く実感しました。

また、現地の先生方との会話を通じて、英国の医療制度や泌尿器科診療体制について伺うことができました。英国の泌尿器科研修では幅広い泌尿器科診療を修得した上で、施設によっては腫瘍、結石、機能・再建、ロボット手術などのチーム単位で診療を進める場面が多いとのことでした。日本と比較して、サブスペシャリティごとの役割分担やチーム医療の色合いがより明確である点が印象的でした。

病院見学後には、Guy's Campus内にあるGordon Museum of Pathologyを見学しました。同館はKing's College Londonの病理学博物館で、英国最大の教育用医学博物館とされており、一般には公開されていない教育

施設です。館内には、ホジキン病を記載したThomas Hodgkinに関連する標本をはじめ、現在の疾患名に名を残す医学者たちの貴重な標本や資料が収蔵されており、歴史的標本が並ぶ空間から、医学が長い時間をかけて知見を蓄積してきたことを実感しました。さらに、Old Operating Theatre Museumも訪問しました。同館は1822年に建てられた手術室で、当時の手術室は、教育のために学生らが手術を見学する空間でもあり、そこから現在の英国で手術室を指す“operating theatre”という呼称につながっていることを知り、大変驚きました。

EAU26 本会では、Plenary Session, Game-changing Session, Live Surgery などを中心に参加し、前回よりも発表内容を自分の臨床経験と結びつけながら理解することができました。特にオリゴ転移を有する前立腺癌や超高リスクNMIBCをテーマにしたPlenary Sessionは非常に議論が白熱しており、エビデンスを日常診療へどう落とし込むかという視点が強く意識され、大変勉強になりました。

また、同世代の先生方や海外のResidentと交流できたことも本プログラムの大きな魅力でした。臨床、研究、キャリアについて率直に話す中で、自分も国内外で発表し、議論できる泌尿器科医でありたいという思いを新たにしました。最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださいましたJUA・EAU両学会関係者の皆様、国際委員会の先生方、ご推薦・ご指導を賜りました諸先生方に心より御礼申し上げます。



写真1 病院見学後、現地の先生方と撮影した写真

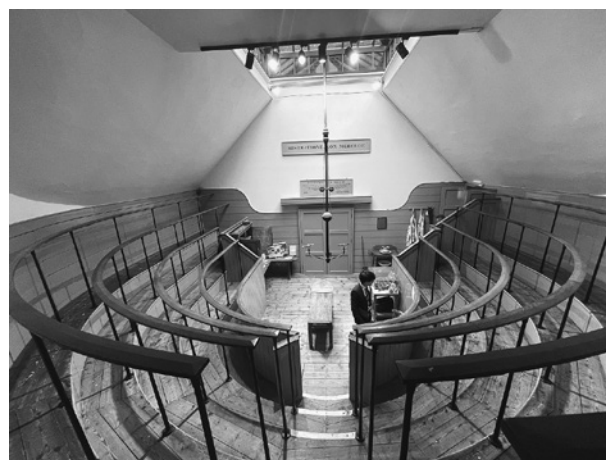


写真2 Old Operating Theatre Museum 麻酔・消毒法が確立される以前の手術室